

2013 年 3 月フィリピン訪問プログラム

ともしび
共生委員会ニュース

2 号　2014 年 6 月 19 日版

共生委員会ニュース「ともしび」　　スクールモットー「地の塩、世の光」

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる 2 年生の修学旅行だけでなく、高等部の 3 年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

フィリピン訪問プログラム



フィリピンという国をご存知でしょうか。フィリピンは、東南アジアのキリスト教国で、スペイン、アメリカ、日本などに支配される時代が長く続きました。現在では大きく経済発展していますが、一方でスラム街やスモーキーマウンテンなどが依然として存在している、貧富の差が大きな国のひとつです。

青山学院では、毎年、チャイルド・ファンド・ジャパンという団体へ送られるクリスマス献金を通じて 2 名のフィリピンのチャイルドを支援しています。そのお金で、彼らは学校に通い、自分の将来に向けて学んでいます。ただ、献金の一部で数人を支援しても、貧困の問題の解決には結びつきません。それ以上に、世界の貧困問題を解決する方法などあるのでしょうか？

そこで、フィリピンを舞台に、貧困問題をその仕組みから理解し、どういう支援が可能なのかを考えるプログラムが、昨年度から高等部でも始まりました。

2012 年度　青山学院フィリピン訪問プログラム　　*「会いに行く」から、はじめよう。*

2013 年 3 月 21 日～28 日（6 泊 7 日）

このプログラムでは、8 名の高等部の生徒が秋から毎週昼休みに集まり、貧困のしくみについて学習したのちに、実際にフィリピンを訪問し、現地の人たちと交流します。一昨年度はフィリピンの、東京とはあまりに違う社会に驚きながらも、現地の人たちの温かい歓迎を受け、とても豊かな時間を過ごすことができました。

青山学院高等部　フィリピン訪問プログラム 2014

渡航期間　2015 年　3 月下旬（6 泊 7 日を予定）

今年度もフィリピン訪問プログラムが開催される予定です。
詳細は未定ですが、9 月頃に貼りだされることになりますので、興味のある人はぜひ申し込んでください。

問合せ先　：相良（宗教主任）　藤本（地理歴史科）



2 年生　昨年度 3 学期　二重被爆の映画を観ました（2014 年 1 月 23 日）

64 期生は 1 年生の 3 学期に修学旅行に向けての事前学習として学年集会を行いました。広島と長崎とで 2 度の被爆をした山口彊(つとむ)さんについての映画を見た生徒の感想を紹介します。

HR210(旧 HR103)　S.M.

「One for all, all for one」、「人間同士なら分かり合えるはずだ」映画ではいくどもこの言葉が出てきました。アメリカの高校生にアメリカ人をにくんでいないのか聞かれたときもこう答えて、憎んでいるとは答えませんでした。私は山口さんはきっとアメリカを憎んでいたのだと思います。二度も被爆をし、後遺症と戦い続けて憎まないはずがないです。しかし、山口さんは憎んでいるとは答えず、高校生と真摯に向き合い続けました。それは被爆者として、人として、憎むことは戦争にしかつながらないと知っていたからだと思います。山口さんの様々な講演の中で涙をこらえながらお話をする姿はとても心に残りました。一度は家族を守るため、あきらめたけれど、それでも家族の支えの中で語り手になり涙をこらえながらも話し続ける山口さんからは核は地球にあってはならないという強い決意を感じました。

私にとって原爆は遠い昔に起こった悲劇で怖くて原爆に関する本を読むこともありませんでした。私のように原爆について関わってこなかった人はたくさんいると思います。そんな私たちに反核を伝えるため、つらい過去を話し続けた山口さんを尊敬します。山口さんは私たちに自分の運命を受け入れることや行動を起こすことの大切さを身をもって教えてくれました。また、山口さんがつないでくださった記憶の鎖を私たちがしっかりと世界につなげていかなくてはならないと実感しました。山口さんはキャメロン監督に自分の義務は果たしたとおっしゃいました。私も自分の義務は果たしたと言えるような人生を送りたいと思います。

HR203(旧 HR105)　O.K.

第二次世界大戦は勿論、原爆も経験していない私たちにとって、それは未知の世界であって、想像することすら難しい。私たちに「原爆とは何なのか」それを定義してくれるのは、毎年 8 月に報道されるニュースで流れる、何度も目にする、あのキノコ雲を映した映像だけだ。実際に戦時中や原爆投下後は、自分の命を守るのに精一杯で、街の様子などの映像を撮影することなんてとてもじゃないけれど不可能だったと思うし、この悲惨な情景を後世に残そう、なんて頭が働くほどの余裕は人々には無かっただろう。それにしても、私たちの世代には、原爆の惨禍について知る術が少なすぎるだろうと思う。どれだけ原爆が恐ろしかったか、なんとなくでしか認識できていないこの世代に憲法の改正について正しい判断ができるだろうか。残されているものは少ない。しかし、まだ、生きている。被爆者が生きている。物から受けるメッセージよりも、人から受けるメッセージの方が、何倍も重いに決まっている。山口さんが真剣に発する一言一言をうけて、人が語る言葉はなんてパワーがあるのだろうと思った。二度と思い出したくないであろうその時を、山口さんは毎日のように、私たち若い世代のために、苦しくても、思い出してくださっているのだろうと思った。日本の、世界の将来のために、涙を流してでも、伝えてくださっているのだと。戦争を体験していないから、多分これから先も戦争は起きなさそうだし、遠い存在でいいや、そう思っていた自分の考えを変えなければいけないと思った。被爆者が生きているうちに、しなければならないことが沢山あるという焦りさえ湧いてきた。戦争の惨禍から目をそむけずに、向かっていなかければいけないと思う。映画を見ただけだけど、山口彊さんに、ありがとう、と言いたくなった。

HR204(旧 HR110)　M.R.

私は中等部の時に山口さんの著された本を読んでいたし、英語の授業でも扱われたので、山口さんの経験した凄惨な被爆体験については映画を見る前から知っていました。戦争に関連する授業や映像、書籍を見る度に、私なりに深く考えてきたつもりでしたが、映画の中で、時折苦悶の表情を浮かべながら自らの思いを口にする山口さんの姿を見て、改めて、いかに平和が尊いことか、理解し合うことが大切かを感じさせられました。山口さんは何度も“One for All, All for One“という言葉を口にしていました。この言葉は、しばしば耳にする言葉でもありますが、キリスト教の教えの 1 つ「隣人を愛する」ということにも繋がるように思います。被爆者である山口さんが世界へ平和のメッセージを発信する姿は「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る」ということと重なって思えます。平和が当たり前にある現代の日本に生まれた私には、山口さんと同じ経験をすることはできませんが、戦争に関する情報を集めたり、お話を伺ったりすることはできます。戦火をかいくぐり生きた人のお話を伺うことがもう難しくなりつつあります。若い私たちにできることは、凄惨な歴史を二度と繰り返さないよう、その日に何があったのか、人々はどう生きたのかを学び、平和の大切さを感じて、また次の世代へと受け継ぐことだと思います。修学旅行ではこれらのことをふまえ、平和学習に臨みたいと思います。

サッカーW杯　開幕！

MAKING CHANGES THROUGH SPORT

Sam Berry(英語科)



Are you enjoying the World Cup? I am a big football fan, but my mother hates it. She thinks it's boring, pointless, and sometimes violent. I understand her point, but for me football has been a big part of my life, and I believe football, and other sports can lead to cooperation, and friendship.

Every time I travel to another country, I take a football with me. I often travel alone, but when I have a football, I can always make new friends, no matter the country, no matter the language. For example, I've played football with strangers in Spain, Uganda, Peru and of course in Japan. Every game ends with a handshake or a hug! Not only is football a great way to make friends, but it helps me realize that, despite all the differences between countries, we are really very similar.



One of my favorite historical stories is from World War I. In 1914, British soldiers and German soldiers were fighting. However, on Christmas Day, just for one day, the soldiers decided to stop fighting. The British soldiers and the German soldiers met and they decided to play a game of football! I think this story shows the power of sport in helping us overcome our differences.

I also believe that through football and sports we can do good things. This month I will play in a charity futsal tournament. There will be many teams from many different countries. We are raising money to build a football pitch for children in a poor area in Rio. We are also collecting soccer balls to give to children in Brazil and in Senegal. Although the World Cup will bring a lot of money to big companies, politicians and FIFA, very little money will go to helping and developing poor areas. When we are enjoying the games in the World Cup, we should remember this, and think "what can we do to help?"



What can you do?

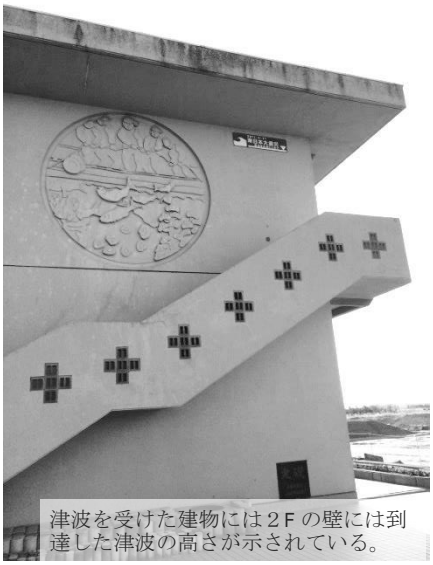
- Are you in a sports club? How about thinking about a sports exchange with Miyako High school?
- Do you have any old soccer balls? I am collecting soccer balls to send to a school in Senegal. If you want to help, bring me a football!
- Think about becoming a volunteer at the Rugby World Cup or the Olympics. Thousands and thousands of people will visit Japan for these events. Japan needs friendly, international people who speak foreign languages to make it a successful event. Therefore you should become a friendly international person who speaks foreign languages! The true purpose of events like the World Cup, and the Olympics is to promote peace and unity by showing we are all part of an international community.

HR302 A.R.　東北被災地のボランティア

春休み中のボランティアを自分で見つけて参加した 3 年生A君の体験を紹介します。「日本に住んでいて、行かないといけない」と思い、参加したそうです。

福島県にある山元町は東日本大震災で大きな被害を受けました。津波により町中の家屋が流され一面が更地と化し、福島原発事故による放射線の影響で名産物であったホッキ貝の漁もできなくなりました。他にも様々な被害を受けましたが、震災から 3 年半が経過した現在でさえそのほとんどが回復していないのが現状です。山元町が壊滅的な被害を受けた大きな理由は、町が海から非常に近いところに位置することです。震災当時町内に 7 本あった警報用の電柱は津波によって全て折られてしまったため、代わりに消防団の方々が自分達の足で町中の人々に避難を呼びかけました。しかしその消防団の方々もまた津波に飲まれ殉職されました。このような経験を踏まえ、山元町では防波堤の高さを従来のものより高くすることにしたそうです。それにより津波の被害を「小さく」することができると現地の語り部の方はおっしゃりました。被害を「なくす」と言わず、小さくする、と強い口調でおっしゃった語り部の方の言葉を聞いて、いくら備えても人間の想像を遥かに上回る破壊力と共に襲ってくる自然災害に対する東北の方々の覚悟のようなものを感じました。被害 0 を目指すのは大切なことだけれど、現実をしっかり受け止め被害を最小限に抑える、というより現実的な目標を掲げることが最も重要です。一方東京にいる自分達が東北の為にできることは限られています。東北の為にできること、と聞くとまず義援金が頭に浮かびますが、今現地の方々が最も必要としているのはボランティア活動をはじめとした人手です。震災から 3 年半が経過した現在でも畑に瓦礫が埋まっているがために農業を再開できない方々がいます。義援金を送るのも復興に繋がる大切なことですが、現地へ行って直接作業を手伝う方がより早い復興に貢献できます。自分も直接的に被災地復興に携わる機会を増やしていこうと思いました。


津波によって家を流され、現在もそのままの土地


津波を受けた建物には２F の壁には到達した津波の高さが示されている。

A.R.

【募集】◎平和・共生に関する活動に興味がある人は武藤、相良、藤本、中久木、キャロル、ベリーまで。

◎共生委員会ニュースに掲載する文章を募集中です。（武藤まで）

◎7 月 25 日　寿地区でホームレスの方々との炊き出しお手伝い募集（ボランティア部　片山先生まで）

夏休み中にはぜひ様々な経験をして下さい。また原爆など戦争や平和に関する報道が多くなされますので、積極的に目を向けていって下さい。